

中村星湖の農民小説にみえる法律問題

頼 松 瑞 生*

Legal Problems on Peasant Novels Written by Nakamura Seiko

YORIMATSU Tamao*

Abstract

Nakamura Seiko (1884-1974) was a Japanese novelist. His most famous work is a novel titled “Boys Go” (1907). It counts among best peasant novels in the Meiji period. In the novel the author criticized a policy changing common land into national land or Imperial land. He was interested in Japanese rural culture and did awareness building activities for peasants over many years. This study tries to analyze legal aspects on his peasant novels and clarify the legal consciousness of ordinary people at the time.

キーワード：金銭消費貸借契約、債務保証人、土地台帳、皇室財産、不動産抵当

Keywords：LOAN AGREEMENT, SURETY, CADASTRE, IMPERIAL PROPERTY, REAL ESTATE MORTGAGE

1. はじめに

村における農民たちの生活を描写した文学を農民文学という。我が国でこの種の文学が確立したのは、明治40年代であるとされる。すなわち、この時期、真山青果の「南小泉村」(明治40年)、長塚節の「土」(明治43年)など、この分野における先駆的小説が発表され、高い評価を受けることとなった。これ以降、犬田卯、伊藤永之介、和田傳、丸山義二、平田小六などの作家が現れ、活躍し、農民文学は隆盛を極めた。この種の文学は、当時の農村社会のあり方を描写しており、法制史、経済史、社会史などの研究を行う上で、史料価値を有するものといえる。つまり、そこには、当時の農村において人々がどのように法を受容していたかが現れているのである。

農民文学の濫觴期である明治40年代において、

「南小泉村」や「土」などと共に、その時代の代表的作品として挙げられることが多いのが、中村星湖の「少年行」(明治40年)である。作者の星湖は、明治17年に山梨県南都留郡河口村(現在は富士河口湖町)に生まれた。早稲田大学英文科在学当時から、新聞『萬朝報』や文芸雑誌『新小説』の懸賞小説に応募・投稿するなどして、小説家としての道を歩み始めたが、その出世作となったのが「少年行」(明治40年)である。当時、この作品は、文芸雑誌『早稲田文学』の懸賞小説の第一等当選作品となったことで、文壇の注目を集めた。生まれ故郷の河口村で過ごした少年時代の思い出を題材として描いたもので、農村における生活が描かれていることから、農民文学の一つとして捉えられている。それ以降、短編小説を中心に数多くの作品を発表し、中堅作家としての地位を固めた。農民文学専門というわけではなかったが、農村生活を主題とした小説を数多く残している。特に昭和期に入ってから、農村文

*工学部人間科学系准教授 Associate Professor, Department of Humanities, Social and Health Sciences, School of Engineering

化の発展に強い関心を寄せ、それに関する執筆や講演などを積極的に行った¹⁾。

したがって、中村星湖は、我が国における農民文学の代表的作家の一人として欠かせない存在といえよう。本稿では、その代表作「少年行」に加えて、短編の農民小説「畑」(明治 43 年)を取り上げ、その中から法的に問題となる事柄を選び、検討することとする。それを通じて、明治期の農村社会における法のあり方が明らかになればと考える。

2. 「少年行」(明治 40 年)

(1) 姻族間の金銭消費貸借契約

「少年行」の主人公は作者である星湖自身をモデルとしており、物語の前半部分は郷里で過ごした少年時代が描かれている。すなわち、主人公武の父は糸繭を扱う商売人である²⁾が、田畑も所有しており、一家で農業に従事していた。主人公の武は、小学校に通う一方、村外れの並木で落ちている柴を拾い集める³⁾など、家の手伝いに精を出す働き者の少年である。ある日、そのような武の生活に変化が訪れることになる。校長の甥である宮川牧夫が小学校に転校してきたのである⁴⁾。やがて、武と牧夫は親しくなり、その後の物語は、この二人の交流を中心に展開していくことになる。

この小説において、先ず、法的に問題となるのは、武の伯父が妻の弟の学業のために多額の資金を融通したものの、相手に借金を踏み倒されるという場面である。すなわち、それは、以下のように記述されている。

伯母の弟が借人、其親が連署で、立派に証書を入れただけでも四五百円、只で強請(ねだ)られたのは数知れぬとの事である。お蔭でやうやう医者になりながら、妻が死ぬと其(それ)つ限(き)り構ひも附けぬと、有繋(さすが)の伯父貴も不平を鳴らした。

そら見た事かと罵つても追附かぬ。阿爺(おやぢ)は伯父と同道して談判に出掛けた。向うの父親と云ふのが酢でも蒟蒻でもと云ふ難物で、倅は知らぬ事で一切自分の業(わざ)だ、殊に俺(わし)が保証人だからどうぞ俺から取つて呉れと、叩い

ても酒臭い嘔(おくび)より出もせぬ体で逆振(さかねち)を喰はそうとする。正直一途に固まつた阿爺のこくは破裂した。喧嘩にならざるを得なかつた。が他人が入つて、向うの娘と伯父との間に出来たひとり児を一人前に学問を仕込み、且つ伯父の商売の資本を若干出すと云ふ事で一先(ひとまづ)落着した。其内に子供だけは引取つたが、金は何月何日と云ふ期限は過ぎても揃へて来なかつた⁵⁾。

この場合、伯母の弟が債務者であるにもかかわらず、交渉の場に出てくることなく、保証人であるその父親が、自分から借金を取り立ててくれと述べている。ところが、債権者である伯父の側は、直ちに、その通りにせず、債務者側と揉めている。これは、恐らく、保証人である父親に取り立てるべき財産がほとんどなかったからであろうと考えられる。そうでなければ、保証人の財産を差し押さえるという法的手段に出ることができたはずである。

しかし、ここで疑問となるのは、多額の金銭を他人に貸す場合、財産がほとんどなく、支払能力がないような者を保証人として認めるであろうかという点である。ただ、明治 6 年の金穀貸借請人証人弁償規則(太政官布告第 195 号)は保証人の能力について何ら規定するところがない。この点について規定するのは、時代は下るが、明治 31 年に施行された民法(明治民法)である。すなわち、明治民法第 450 条第 1 項は「債務者カ保証人ヲ立ツル義務ヲ負フ場合ニ於テハ其保証人ハ左ノ条件ヲ具備スル者タルコトヲ要ス」と規定し、その第 2 号に「弁済ノ資力ヲ有スルコト」という条件を挙げている。したがって、明治民法の立場に立つと、小説で描かれているように、財産をほとんど持たない者が保証人となるのは、問題があるといわざるをえない。

もっとも、これに関連して、民法第 450 条第 3 項は「前二項ノ規定ハ債権者カ保証人ヲ指名シタル場合ニハ之ヲ適用セス」と規定しているから、債権者である伯父が債務者の父親(債権者にとっては義父)を保証人に指名していたとするならば、法的には問題がないということになる。ただ、資力がない者を保証人に指名することは、債務の弁済を受けられない危険性を負うことになるため、賢明な選択と

はいえない。この場合、相手が資力を有するかどうかをよく調べずに、保証人に指名したとするならば、多額の金銭を貸す者としては、まさに迂闊であったと考えざるをえない。

ただ、この場合、主債務者の父親が、保証人となるにあたって資力があるかのように装っていたとも考えられる。そうすると、父親は、最初から息子の借金を肩代わりする意思がなかったということになり、債権者に対して詐欺行為を働いたものとして、刑事責任を問われる可能性が出てくるのではないか。「少年行」が発表されたのは明治 40 年であるから、小説で描かれている時代には旧刑法(明治 13 年太政官布告第 36 号)が施行されていた。したがって、ここで適用されるとすれば、旧刑法が規定していた「詐欺取財ノ罪」である。旧刑法第 390 条は、これについて「人ヲ欺罔シ又ハ恐喝シテ財物若クハ証書類ヲ騙取シタル者ハ詐欺取財ノ罪ト為シ二月以上四年以下ノ重禁錮ニ処シ四円以上四十円以下ノ罰金ヲ附加ス」と規定していた。つまり、債務者の父親は重禁錮の刑に処される可能性もあったということになる。

しかし、小説では、そのような罪に問われることにはなっていない。それは、債権者側の伯父が告訴をしなかったからである。当時の治罪法(明治 13 年太政官布告第 37 号)は、その第 93 条第 1 項において「何人ニ限ラス重罪軽罪ニ因リ損害ヲ受ケタル者ハ犯罪ノ地若クハ被告人所在ノ地ノ予審判事検事又ハ司法警察官ニ告訴スルコトヲ得」と規定していた。したがって、債権者側は告訴することもできたはずであるが、そのような行動に出ることはなかったのである。恐らく、相手が妻の父親という身近な関係の者であったため、外聞を憚ったのであろう。

ただ、ここで法的に問題となるのは、そもそも、この事例が親族相盗例に該当するため、相手を告訴できなかったのではないかという点である。つまり、当時の旧刑法第 398 条は、「詐欺取財ノ罪」に関して「此節ニ記載シタル罪ヲ犯シタル者第三百七十七条ニ掲ケタル親属ニ係ル時ハ其罪ヲ論セス」と規定し、親族相盗例が適用される場合であることを明らかにしていた。しかし、旧刑法第 377 条第 1 項は、「祖父母父母夫妻子孫及ヒ其配偶者又ハ同居ノ兄弟姉妹互ニ其財物ヲ窃取シタル者ハ窃盗ヲ以テ論ス

ルノ限ニ在ラス」と規定する。すなわち、この事例のような妻の父親が相手である場合は、親族相盗例の対象とはならなかったのである。したがって、法的には相手を告訴して、その刑事責任を問うことは可能であった。

さらに問題となるのは、保証人に資力がなかったとしても、主債務者(債権者の義理の弟)に対して、強制執行を行うなど、何ら法的手段に訴えようとしていないことである。そもそも、金銭を借りたのは、名義上、債権者の義理の弟であって、その父親(保証人)ではない。それにもかかわらず、保証人ばかりが債権者との交渉の前面に出て、主債務者本人の責任が直接問われることがないのである。主債務者は債権者より借りた金銭で医学を学び、今では病院を経営するほどになっている。したがって、債務を弁済するための資力が全くないとはいえないであろう。しかし、小説では、保証人であるその父親が専ら債権者との交渉にあたっていることもあって、表立ってその責任が追及されることはない。ここでも、債権者は法的手段を行使することよりも、外聞を憚ってであるか、保証人が妻の父親であることに配慮してしまうのである。

とはいえ、貸した金額が相当に多額であり、債権者にとって財産の大部分を占めるほどであるということであれば、借金を踏み倒されたままでよいわけがない。そこで、小説では、債権者側が債務者側と再交渉し、(1)債権者の子供を債務者に引き取らせて、教育を受けさせるという条件と、(2)期限を定めて、債務者が債権者に対して商売のための資金を提供するという条件で、話がまとまったことになっている。この中で、(2)の条件は、事実上、弁済期日の延期に該当するもので、当事者間で合意がなされれば、問題がないと思われる。

ここで問題となるのは、(1)の条件である。すなわち、債権者は財産の大部分を債務者に貸し与えたため、経済上、自分の子供を養育するのが困難となった。債務者は、その責任を負うべき者であるため、子供の養育を引き受けることになったと考えられるのである。ただ、この場合、債務者の父親は、その子供にとって、母方の祖父にあたり、扶養義務を負うのが当然であるように理解できる。

それでは、当時の法制度において、扶養義務に関

してどのように定められていたのでしょうか。小説において子供の引き取られた時期が明確に記されているわけではないが、他の場面に示されている年号などから推測して、だいたい明治 20 年ぐらいではないかと考えられる⁶⁾。この時期は旧民法の編纂が完了しておらず、家族に関する立法は、複数の太政官布告などによってなされていた。しかし、法制史学者の高柳真三が指摘するところによれば、明治 23 年に旧民法が成立するまでは、扶養義務に関する立法は見られなかったということである⁷⁾。例えば、明治 14 年に出版された『現行民法人事篇』⁸⁾においても、掲載されている法令の中に扶養義務に関するものは見られない。

ただ、法制史学者の石井良助によれば、江戸時代に「合力」と呼ばれた制度があり、その中に、親類が扶養対象者を引き取って扶養する「引取合力」というものが存在していたとされる⁹⁾。このような制度が明治に入ってから慣習として残っていたならば、母方の祖父が孫を引き取るのは当然のことであつたと考えられる。しかし、明治 13 年に司法省が発行した『全国民事慣例類集』¹⁰⁾には、「合力」のことは記載されていない。したがって、小説において母方の祖父が孫を引き取ることになっているのが当時の慣習であつたかは不明であるが、人情としてこのような行為が行われたと解することもできる。とはいえ、それが、事実上、借金の返済を遅らせる口実として行われている側面があることも否めないであろう。

(2) 精神病院による入院患者の財産調べ

「少年行」では、主人公武の親友である宮川牧夫が法律家を目指して、法学院(中央大学の前身である東京法学院のことと思われる)に入学するが、在学中に、重度の精神病に罹り、精神病院に入院させられることになっている。それに関連して法的に問題となるのは、その精神病院から村役場に財産調べの問い合わせがなされたという記述のあることである。恐らく、精神病院が入院患者である牧夫の財産に関して調べようとしたのではないと思われる。したがって、問い合わせた村役場というのは、牧夫の本籍地である村の役場であろう。何となれば、調査対象となった財産とは、主として資産価値のあ

る不動産を指し、それは牧夫の本籍地にあるように考えられるからである。

当時、不動産の権利関係を示すものとしては、土地登記簿と土地台帳があつた。しかし、この中、土地登記簿に関しては、土地の権利関係を示すものに過ぎず、それを見ただけでは、その土地の資産的価値などを把握することはできなかった。これに対して、土地台帳は、「土地ニ関スル事項即土地ノ字、番号、地目、段別、地価、地租、所有者及質取主ノ住所氏名ヲ登録」¹¹⁾したものであるから、その資産的価値などを含めて、土地に関する情報を知るには好都合であつた。したがって、小説の中で、精神病院が調べようとしたのは、牧夫が所有する土地に関する情報を記載した土地台帳ではなかったかと考えられる。

ただ、土地台帳に関しては、当時の土地台帳規則(明治 22 年勅令第 39 号)が、第 2 条において「市ノ土地台帳ハ府県庁ニ於テ町村ノ土地台帳ハ島庁郡役所ニ於テ之ヲ設ケ其事務ヲ取扱フヘシ」と規定していた。つまり、村の土地台帳は、郡役所が管理していたのである。しかし、当時は、村役場においても、土地台帳を備えるということになっていた¹²⁾。したがって、小説で描かれているように、精神病院が村役場に対して土地台帳に記載されている情報を問い合わせることは可能であつたと思われる。

それでは、何故に精神病院は入院患者の財産に関する情報を調べる必要があつたのであろうか。考えられるのは、患者の入院期間が長期にわたることが予想されたため、患者側が入院費用を負担できるかどうかを把握しておかなければならなかったからではないかということである。つまり、国民健康保険制度がなかった当時としては、入院費用はすべて患者側が負担せざるをえなかった。これに関して、当時の精神病患者監護法(明治 33 年法律第 38 号)第 10 条第 1 項も、「監護ニ要シタル費用ハ被監護者ノ負担トシ被監護者ヨリ弁償ヲ得サルトキハ其ノ扶養義務者ノ負担トス」と定めていたから、病院としては患者の財産状況を調べておく必要があつたといえる。そうであるならば、病院が村役場に問い合わせを行ったことも理解できよう。

そこで問題となるのは、牧夫が実際に資産としての土地を所有していたかということである。小説に

よれば、牧夫の父親はすでに亡くなり、その後、母親は再婚したことになる。亡くなった父親に身寄りがあったことが記されていないため、明治民法の規定に従えば、一人息子である牧夫には父親の財産を独占的に相続する権利があったということになる。すなわち、明治民法第 970 条第 1 項は、「被相続人ノ家族タル直系卑属ハ左ノ規定ニ従ヒ家督相続人ト為ル」と規定していた。もっとも、この小説の記述から、父親が死亡したのは明治 20 年前後と推測されるから、明治民法が施行された明治 31 年より前のことである。しかし、それにもかかわらず、牧夫が家督相続人となることには変わりがないと思われる。何となれば、当時の法令を掲載した『現行民法人事篇』(明治 14 年)において、「華士族平民共家督相続ハ必ス長男タルヘシ」¹³⁾と述べられているからである。これは明治 6 年の太政官布告第 263 号の内容を解釈した結果を示したものであるが、牧夫は一人息子であるため、まさに優先的に家督相続人となる資格を有するといえるのである。

ただ、ここで考慮しなければならないのは、牧夫が母親の再婚相手と養子縁組をした場合、その家督相続人としての地位はどのようになるかということである。この点について、明治民法第 744 条第 1 項は「法定ノ推定家督相続人ハ他家ニ入り又ハ一家ヲ創立スルコトヲ得ス」と規定していた。それは、当時の民法注釈書がいうように、「法定の推定家督相続人は必ず其家の相続を為すべきものなれば養子となりて他家に入ることを得ざるものとす」¹⁴⁾からである。そのことは、明治民法施行以前においても、同様であった。すなわち、『現行民法人事篇』は、「凡ソ嫡長子孫タルモノヲシテ他家ノ養子ト為スコトヲ得ス」¹⁵⁾というのである。したがって、牧夫が母親の再婚相手の養子となることは認められず、結果として、その家督相続人としての地位は揺らぐことがなかったといえよう。そのため、牧夫は、入院した時点においては、一家の戸主として、父親から引き継いだ土地を所有していたと考えられる。

もっとも、これに関して疑問となる点がある。それは、牧夫の幼年時において、誰が後見人としてその財産管理を行っていたかということである。すなわち、『現行民法人事篇』には、「華士族平民戸主幼

少ナルトキハ後見人ヲ附スヘシ」¹⁶⁾とあり、幼年の戸主には後見人を付すべきことが示されていた。その上で、後見人の選定については、以下のように述べられている。

凡幼年ノ後見人ヲ選ムハ親戚他人及ヒ戸ノ内外ノ者ヲ問ハス族籍ノ如何ヲ論セス親族会議ノ上丁年以上ニシテ幼者ノ家産ニ於テ有益ノモノヲ撰ミ附スヘシ¹⁷⁾

つまり、幼年戸主の後見人となる者は、必ずしも同家の者である必要がないということである。したがって、小説の場合、牧夫の後見人となる者は、母親の再婚相手であるか、母親の弟で、一時的に牧夫を引き取って養育していた小学校校長であるか、何れであろうとも問題ないということになる。ただ、小説においては、この点について何ら触れられていない。このことは、幼年戸主の財産管理に関する問題に対する作者の無関心を示しているといえるかもしれない。

(3) 御料林の盗伐

「少年行」は我が国における初期の農民文学の代表作とされるものの、農村特有の法的問題がそれほど多く描かれているわけではない。前述の借金返済をめぐる問題や精神病者の財産調べに関する問題も、とりわけ、農村特有の問題というわけではない。したがって、この小説では、当時の農民たちが置かれていた社会的苦境というものが明確に示されているとはいえない。それは、物語において、主人公と友人の交流を描くことに重点が置かれ、農村社会の中で農民たちが直面していた問題にはあまり焦点が当てられていないからである。

とはいえ、この小説においても、当時の農村が直面していた問題の一片を窺える場面がある。その問題というのは、御料林の盗伐と湖水の疎水工事である。ここでは、この中、御料林の盗伐について取り上げることとする。小説では、これに関して、「村尽頭(むらはづれ)の並木で、村の若者が、御料林の盗伐」「とは云へ自然に生えたものを、丸太に切らうが角に挽かうが、かまつた事ではないといふ調子の濫伐」¹⁸⁾をすると記述されている。

御料林とは、皇室財産に属する森林を指し、明治 19 年から 23 年にかけて官有林の一部から編入されたものである¹⁹⁾。小説では、その御料林が村人によって盗伐されていた状況が描かれている。ここで特徴的なのは、盗伐する村人たちに罪悪感が見て取れないことである。それは、恐らく、明治政府が、従来、村人にとって入会地であった森林を強制的に官有化、さらには皇室財産化したことに対する反感があつてのことであろう。当時、木曽地方において、森林官有化の政策に対して、村民から見直しを求める運動が起きたことはよく知られている事実である²⁰⁾。したがって、この小説は、入会地の官有化に対する農民の抵抗運動が盗伐というかたちで行われていたことを示したものと見ることができよう。

しかし、政府の側としても、このような動向を黙認していたわけではない。小説においては、牧夫が武に宛てた手紙の文面に、そのことを窺わせる内容が記されている場面が登場する。すなわち、それは以下の通りである。

けふ大石から一人の狂人が来た。祓(はらひ)の祝詞を読んで去つた。誰だと思ふ、君、前の大石村の村長の坂谷だ。あれでも母の従兄ださうな。気の毒に思つた。病気の起りは矢張盗伐騒ぎに、村民を庇(かば)つて総てを一身に引き受けた、云はば小宗吾だ。小宗吾はよかつたが、気が小さ過ぎて裁判所に引出された時にはもう狂つて居たのだ。今日も何か裁判上の事を口走つて居た。僕の阿爺(おやぢ)は弁護士だつた。その死----あゝ止さう。また斯様(こん)な事を考へると頭が変になる²¹⁾。

これを見ると、御料林の盗伐に対して、官憲による取締が行われていたことが読み取れる。当然のこととして、官林の盗伐は、明治初期より禁じられ、それに違反した場合は制裁が科されることとなっていた。すなわち、「官林及社寺境内ノ竹木ヲ擅伐(センバツ)スルヲ禁ス」(明治 7 年司法省達第 55 号)では、以下のように規定されている。

官林及社寺境内ノ竹木ヲ擅伐シテ橋梁等ニ用

ユル者代価追徴方左ノ通相定候條此旨可心得事

官林社寺境内ノ竹木ヲ擅伐シテ民費ニ係ル橋梁及ヒ社寺修繕等ニ用フル者違令輕重ニ問フテ代価ヲ追徴ス

つまり、官林の盗伐を行った場合、その代価を追徴金として課されるというのである。しかし、これは、盗伐した竹木を民費に関わる橋梁や社寺の修繕等に用いた場合にのみ適用される規定であることから、それ以外の目的で盗伐を行った者に対しては、どのような処置がなされるのかということが問題となる。その場合、考えられるのは、旧刑法(明治 13 年太政官布告第 36 号)の適用である。すなわち、旧刑法は第 373 条において「山林ニ於テ竹木礦物其他ノ産物ヲ窃取シ又ハ川沢池沼湖海ニ於テ人ノ生養シ若クハ營業ニ關スル産物ヲ窃取シタル者ハ亦前条ニ同シ」と規定していた。ここでいう「前条」とは第 372 条のことを指すのであるが、法定刑に関して「一月以上一年以下ノ重禁錮ニ処ス」と定められている。つまり、官林の盗伐を行った者は収監される可能性があつたのである。したがって、小説において、盗伐の責任を被ろうとした村長の精神状態に異変が見られるようになったとあるのも、収監を恐れ、かなりの心労が重なったことが原因であると思われる。これは、当時、官憲が官林や御料林の盗伐に対して厳しく対処していたことを示唆するものといえよう。

さらに、村長の精神状態に関する記述は、前述した、木曽での御料林をめぐる村人たちの抵抗運動を思い起させる。すなわち、明治維新後、官林となつた木曽山林を民有地に下げ戻し、農民に開放するように要求する運動が木曽地方で起こつたのであるが、その先頭に立つたのが島崎正樹である。島崎は、代々、庄屋を務めてきた旧家の出であり、明治に入ってから戸長にも選ばれた。しかし、明治 5 年、官林の下げ戻し運動に奔走したため、戸長の職を免じられてしまう。その後、精神状態に異常を来し、明治 19 年に座敷牢内で亡くなっている²²⁾。小説家の島崎藤村はその子息であるが、代表作の一つである小説「夜明け前」(昭和 4~10 年)は父の生涯を題材として執筆されたことは、よく知られている事実である。

星湖が、「少年行」の中で、村人による御料林の盗伐について責任を取ろうとした村長の精神状態が異常になったと記しているのも、木曽の島崎正樹のことを念頭に置いていたからかもしれない。そうであるならば、「少年行」が発表されたのは、「夜明け前」よりも20年以上も前の明治40年であるから、その当時から、島崎正樹という人物が星湖の出身地である河口村でも知られていたということになる。もっとも、島崎の精神が蝕まれたのは、様々な挫折を経験した結果であって、官林の下げ戻し運動に関わったことが直接の原因とはいえない。しかし、星湖にとって、島崎という人物が官林問題に尽力した人物として記憶されていたとするならば、それが精神状態に異常を来した村長を描いたことに関係していると考えられよう。このことは、当時、木曽地方と同じく、御料林編入問題を抱えていた、河口村のような地域において、木曽における一連の抵抗運動がいかに関心を持たれていたかを物語っているといえる。

3. 「畑」(明治43年)

中村星湖には短編小説が多いが、その一つに「畑」²³⁾という作品がある。粗筋は、生糸商と農業を営む矢崎治平が、苦労して手に入れた畑を、商売の失敗のために手放すというものである。小説によれば、元々、その畑は、治平の近所に住んでいた安藤幸造の父親が所有していたということになっている。興味深いのは、その父親が畑を入手した経緯である。それについて、小説では、次のように述べられている。

その畑は、幸造の阿爺(おやぢ)が若い頃、矢張貸金の抵当(かた)に取った物だが、貸金の期限が切れると直ぐに自分物に書替へようとして争ひが起こった。借金した方では金を揃へて期日までに持つて行つたが受取らなかつたと言ふ。幸造の阿爺の方ではイヤそんな覚えは無いと言張るして、トウトウ裁判沙汰になつて二年懸り出入(でいり)をし、阿爺は東京へまで行つて終にその畑を勝ち得たのであつた²⁴⁾。

すなわち、この畑は、元々、借金の担保として取られたものであった。明治期において、明治民法が施行される明治31年までの間、不動産担保に関して適用された主要な法は、明治6年の地所質入書入規則(太政官布告第18号)である。この規則の第5条は、「質入又ハ書入ノ地所期限ニ至リ貸主借主相談ノ上金銭ヲ返サスシテ地所ヲ引渡候節ハ旧地主其地券ノ裏ニ金主ヘ可引渡旨相認メ其地ノ戸長加判ノ上金主ヨリ新地券書替可願出事」と規定していた。つまり、この規則によれば、債務者が期限内に借金を返済できなかった場合、担保とした地所の所有権を債権者に移転することが認められていたのである。これは、現行民法の規定にはない流抵当を意味するものである。小説において、返済期限が切れると、債権者が直ぐに担保の土地(畑)について名義を書き換えようとしたことが描かれているのも、このような当時の法制度を反映したものであったと思われる。

さらに、この規則に関して注目すべきなのは、第2条が書入(抵当)について「金穀ノ借主(地主)ヨリ返済スヘキ証拠トシテ貸主(金主)ニ地所引当ノ証文ノミヲ渡シ借主ノ作徳米ノ全部又ハ一部ヲ貸主ニ渡シ利息ニ充(アテ)候ヲ書入ト云フ」と規定している点である。すなわち、債務者は担保の土地から収穫された作徳米を借金の利息として納めるというのである。作徳米というのは、年貢米や小作米などを納めた上で余った収穫米のことである。したがって、小説に登場する幸造の父親も、元の地主から作徳米を利息として受け取っていたと思われる。

しかし、その後、幸造が治平にその畑を担保として借金をする際には、治平がすでに畑の一部を借りて耕作していたということになっている²⁵⁾。そうすると、その畑全体が担保となることによって、債権者がすでに借りていた畑の部分についてのみ、質入された地所となるのではないか。つまり、その畑は質入の部分と書入の部分が混在するということになって、利息に充てる作徳米の扱いが問題となってくるのである。ただ、小説では、幸造側が作徳米を利息として治平に納めたという記述はない。そこで、考えられるのは、治平が、従来、畑の賃貸料として幸造に支払っていた分を利息に充てることとし、それによって作徳米の納付を免除したのではな

いかということである。そうであるならば、債権者と債務者の双方の利害が一致することになる。つまり、そこでは、当時の農村における人々が、法令を抛り所にしながら、その利害をめぐる駆け引きを行っていたことが如実に描かれているのである。

注

- 1) 中村星湖の経歴については、榎本隆司編「中村星湖年譜」『明治文学全集 72』(筑摩書房、昭和 44 年)409-416 頁を参照した。
- 2) 中村星湖『少年行』(文遊社、昭和 49 年)22 頁。
- 3) 中村・前掲注 2) 6 頁。
- 4) 中村・前掲注 2) 14-18 頁。
- 5) 中村・前掲注 2) 48 頁。
- 6) 中村・前掲注 2) 51、103 頁。
- 7) 高柳真三『日本法制史(二)』(有斐閣、昭和 40 年)149 頁。
- 8) 編集は市岡正一、発行は博聞社とある。
- 9) 石井良助編『体系日本史叢書 4 日本法制史』(山川出版社、昭和 39 年)235 頁。
- 10) 編集は生田精である。
- 11) 乾宣義・丸山久男著『土地法例』(小林新兵衛、明治 27 年)71 頁。
- 12) 乾=丸山・前掲注 11) 72 頁。
- 13) 市川・前掲注 8) 204 頁。
- 14) 田山卓爾『人事法詳解』(明治大学出版部、明治 43 年)235 頁。
- 15) 市川・前掲注 8) 140 頁。ただし、これには、本家相続の場合など、一部の例外が認められていた。
- 16) 市川・前掲注 8) 393 頁。
- 17) 市川・前掲注 8) 393 頁。
- 18) 中村・前掲注 2) 5 頁。
- 19) 島田錦蔵「御料林」『世界大百科事典 11』(平凡社、昭和 47 年)。
- 20) 町田正三『木曾御料林事件』(銀河書房、昭和 57 年)参照。
- 21) 中村・前掲注 2) 143 頁。
- 22) 沼田哲「島崎正樹」『朝日日本歴史人物事典』(朝日新聞社、平成 6 年)。
- 23) 明治 43 年に『文章世界』に発表された。その後、この小説は、星湖の第二短編集『星湖集』(東雲堂、明治 43 年)に収録された。本稿においては、『明治文学全集 72』(筑摩書房、明治 44 年)所収のものを参照した。以下の脚注の頁数は同書による。
- 24) 前掲注 23) 155 頁。
- 25) 前掲注 23) 155 頁。